

## 話し言葉における接続表現の分析観点をめぐる研究の動向

李 琦

### 要旨

本稿は、1954年～2023年9月までの期間にわたり「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」及び「CiNii Research」に収録された論文の中から、話し言葉の接続表現を扱った49本の論文を研究対象とし、「談話構造」「文法機能」「話者心理・態度」「発話ジャンル」「位相」の5つの分析観点から研究動向を概観した。その結果、1954年～2023年の約70年間、話し言葉の接続表現の分析は、個別の接続表現の本来の意味・機能を分析した研究から、意味の希薄化と機能の拡張現象を研究するものまで広がりを見せていることがわかった。また、言語という記号を対象にした記述的な研究にとどまらず、話者の属性、会話者間の人間関係といった社会属性を加味した「社会言語学」的な観点を射程に入れた研究や、接続表現の使用実態と話者心理との関わりを論じた「言語心理学」、大量のデータを用いた「コーパス言語学」も増えており、研究領域の拡大が確認できた。

キーワード 接続表現, 希薄化, 発話, 派生, 意味拡張

### 1. はじめに

接続表現は書き言葉では前件と後件の間に位置し、前後の接続関係を示す機能を有するが、話し言葉では前件と後件が必ず顕在するとは限らない。理由の一つとして、話し言葉では、もともとの書き言葉を中心とした用法が崩れ、文脈の代わりに頭の中の記憶を前提に使われ、それにより異なる機能を獲得することが挙げられる。すなわち、話しことばの接続表現の場合には、論理関係を示すだけでなく、聞き手に対する話し手の心理（感情・意図・態度など）を伝える機能も発揮する（萩原 2012）。そして、このような拡張的な機能は、日本語母語話者にとっては誤った用法ではなく、むしろ自然な使い方として捉えられている（甲田 2020）。また、接続表現は接続関係を示す以外に、談話標識やフィラー、末尾辞などのような用法も持っていることにも言及されている（小出 2008・萩原 2007 など）。このような用法もまた、日本語母語話者にとっては自然に使用できるが、日本語学習者にとってその使用はもちろんのこと、使用原理の理解も難しい。接続表現の意味が分かっても、論理関係を積極的に示す場合とそうではない場合の用法それぞれに対する理解と使用は容易ではない。

そこで本稿は、広義の日本語研究の立場から、話し言葉における接続表現の分析観点に関する研究の動向を概観し、今後どのような研究が期待されるかについて論じるものである。

### 2. 先行研究

#### 2.1 本研究に関する接続表現の定義

話し言葉における接続表現の研究を分析観点から検討する場合、接続表現とは何かを定義する必要がある。しかし、接続表現の分類と呼び方は研究者により異なっている。本稿では、品詞論的議論を避け、より広範囲の表現を扱うために、「接続表現」という用語を用いるが、本稿

での「接続表現」は石黒（2016）が定義した「接続詞」と重なるものである。石黒（2016：18）は、①文頭で前後の論理関係を表す、②バリエーションは細かく数える、③書き言葉で（も）使われる、④方言は含まない、⑤現代語で（も）使われるという条件を用い、約340の接続詞を挙げ、幅広く接続詞を網羅して考察している。本稿ではその石黒（2016）の接続詞のリストに含まれるものを研究対象とする。

また、研究対象となる接続表現の分類については、石黒（2016）で定義されている接続詞の分類に基づいて分類する。この石黒（2016）の分類を採用する理由は、幅広い範囲で接続表現の意味と機能を分析し、接続表現を大きく4類10種に分けているからである。具体的には「論理の接続詞<sup>1</sup>」「整理の接続詞<sup>2</sup>」「理解の接続詞<sup>3</sup>」「展開の接続詞<sup>4</sup>」の4つのタイプと、「順接」「逆接」「並列」「対比」「列挙」「換言」「例示」「補足」「転換」「結論」の10種に分けられている。本稿はこの接続表現の定義と分類の観点に従って議論を進める。

## 2.2 話し言葉（談話）・接続表現に関する研究概要及び、本稿の位置付け

現代日本語の接続表現に関する研究の流れを概観した研究としては、馬場（2010）が挙げられる。馬場（2010）は1000件近くの研究文献の概要と研究史の概観を示す重要な成果である。馬場（2010）は1950年～2008年の文献を対象とし、約60年間の研究の流れを素描し、文献ごとの内容を挙げながら、研究の流れを概観していく研究である。しかし、馬場（2010）では、話し言葉と書き言葉を分けずに概観したため、話し言葉の接続表現に関しての分析観点が項目別に指摘されているわけではない。また、2008年以降の研究が扱われていないため、最新の研究動向が含まれていない。

馬場（2012）は、話し言葉の接続表現研究が極めて活発に行われていると指摘し、そうした研究の大きな特徴として、主に多様なジャンルでの話し言葉の研究、相互行為の重視、マルチモーダルの観点からのアプローチ、大規模コーパスの一般的な利用などを挙げている。馬場（2012）は、さらに日本語学的な立場で行われた文章・談話研究を、次の6項目に分けて研究動向を概観している。①接続詞・指示詞など文章・談話の結束性に関する研究、②文章・談話の一貫性、文章構造・談話展開に関する研究、③文法的形式の談話機能に関わる研究、④話し言葉（談話）に特徴的な表現や発話の様態・話者交替などに関わる研究、⑤ジャンルや位相・言語使用域などに関わる文体研究、⑥比喻やオノマトペなどの表現研究・レトリック研究。このうち、①～⑤までは本稿で考察したい接続表現と深く関わっており、馬場（2012）の項目分けを基準としつつこれを要約し、「談話構造」「文法機能」「話者心理・態度」「発話ジャンル」「位相」の5つの分析観点から話し言葉における接続表現に関する研究動向を概観する。

<sup>1</sup> 「論理の接続詞」は、「P→Q（PならばQ）」という条件関係をベースにしたものであり、論理の接続詞があると、因果関係が明確になり、文章の流れが論理的になる（石黒2016：18）。

<sup>2</sup> 「整理の接続詞」は、同類のものを並べる加算関係をベースにしたものであり、整理の接続詞があると、長くて複雑な内容も整理され、文章が読みやすくなる（石黒2016：19）。

<sup>3</sup> 「理解の接続詞」は、足りない情報を補う補充関係をベースにしたものであり、理解の接続詞があると、読み手の疑問が解消され、文章の理解が深まる（石黒2016：19）。

<sup>4</sup> 「展開の接続詞」は、話題の展開をベースにしたものであり、展開の接続詞があると、局所的な理解にとらわれずに文脈が捉えられ、書き手の意図がつかめる（石黒2016：19）。

本稿は先行文献の問題点を踏まえ、現時点 2023 年 9 月までの最新の研究を取り入れ、先述した 5 つの項目を使い、話し言葉における接続表現に関する研究の動向を分析する。

### 3. 調査概要

調査対象の選定において、まず、「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」で接続詞と接続表現をそれぞれ表 1 に示す「話し言葉」に関連がある 3 つのキーワードを組み合わせて入力して論文を検索した。具体的には「接続詞」もしくは「接続表現」というキーワードに、「話し言葉」「発話」「談話」のいずれか 1 つのキーワードを組み合わせ、計 6 種の検索条件によって検索した。「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」で検索した結果、論文は 1954 年 9 月～2021 年 12 月までの合計 106 本となった。2021 年 12 月以降の論文を補う目的で「NII 学術情報ナビゲータ (CiNii)」で検索を行ったところ、12 本の研究論文が見つかり、その合計数は 118 件となった。

表 1 調査概要

オンライン学術文献データベース	(1) NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) (2) 国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース
検索日時	2023 年 7 月 10 日 ～ 2023 年 9 月 25 日
検索キーワード	(1) 「接続詞」「話し言葉」 (2) 「接続詞」「発話」 (3) 「接続詞」「談話」 (4) 「接続表現」「話し言葉」 (5) 「接続表現」「発話」 (6) 「接続表現」「談話」

以上の手順で検索したものから、重複結果を排除し、研究論文・学会発表の予稿集などの「研究・調査対象」「研究目的」「考察」の全てに目を通した上で、さらに以下の 7 つの条件に合致したものは除外し、研究対象となる論文を抽出した。

- I. 学会発表の予稿集、報告書、展望や書評。
- II. 博士論文や図書など、内容が大部にわたるゆえにキーワードには該当するが、実際の内容としてはキーワードの事項との関連が低いもの。
- III. 節と節との接続機能を持つ接続助詞及び接続助詞と同様の機能を果たす連語を主な対象とする研究文献。
- IV. 日本語以外の言語及び、方言に関する研究文献。
- V. 日本語学習者の使用実態・第二言語習得のみを取り上げているもの。
- VI. 話し言葉のデータが言及されていないもの。
- VII. 「接続表現」に関する記述が一部しか含まれていないもの。

最終的に 49 本の研究論文が調査対象として抽出された。第 4 章で、この 49 本の論文内容を整理し分析した結果を示す。

## 4. 分析結果・考察

### 4.1 質的研究と量的研究の割合

一般に接続表現の研究は大きく質的研究と量的研究の2つに分けられる。質的研究は主にデータの質やその背後にある意味を探究するもので、個別のケースや現象を詳細に分析することを目的としている。一方、量的研究は数値データや統計的な手法を利用して、大量のデータから一般的なトレンドや関係性を明らかにする研究方法である。対象の論文の中では、質的研究と量的研究のいずれにも該当する研究が6本存在した。残る43本は質的研究に相当することが確認できた。つまり、今回、抽出された論文群はすべて質的研究に関わりを有するものであった。質的研究と量的研究の両方の性格を備えた論文は、接続表現の出現傾向に関する研究に関するものであった。一方、接続表現ごとの意味・機能に関する研究はすべて質的研究に相当するものであった。

また、日本語母語話者の発話データにおける接続表現の全体的傾向を考察したものは14本で、残る35本はあらかじめ特定の接続表現に絞った上で論じているものであった。

このように、これまでの接続表現に関する研究では、質的研究を中心とする研究が多く、量的研究に関する研究はまだ多くないという現状がある。その理由の一つは、日本語母語話者の量的な使用実態を知るのには、膨大なデータが必要とされるからである。特に、書き言葉のデータ収集と比べ、話し言葉では、音声データの収集及び、文字化などの作業も必要とすることなどから、公開されているデータも限られている現状から、量的研究が少ないと推察される。しかし、近年では、話し言葉の大規模コーパスの構築といった動きが見られ、ここ数年では、そうした膨大なデータを対象にして、応用も含めた分析の試みも数多くなされるようになった(砂川2011)。このように多様な話し言葉コーパス<sup>5</sup>が構築・公開されてきたことにより、発話データの分析は比較的容易になったため、現在では話し言葉の中で用いられる接続表現の機能を量的に考察することが可能になり、事実そうした研究も見られる。しかし、今回の調査の範囲では、大量のデータを用いて量的に接続表現を使用する研究は現時点ではまだ少なく、使用実例を用いた質的記述・分析が多いことが確認された。

### 4.2 研究対象の年代別集計

抽出された49本の研究対象を、発表時期順にそって1999年以前、2000年～2009年、2010年～2023年という3つの時期に分けた。具体的な各時期の論文の割合を表2で示す。

---

<sup>5</sup> 講演を中心とする『日本語話し言葉コーパス (Corpus of Spontaneous Japanese : CSJ)』、日常会話200時間をバランスよく収録した『日本語日常会話コーパス (Corpus of Everyday Japanese Conversation : CEJC)』、調査課題のバリエーションが豊富である『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language : I-JAS)』のようなコーパスが挙げられる。

表2 データ概要

発表時期	研究論文	テクニカルノート	件数と全対象の中の割合
1999年以前	14	0	14 (29%)
2000年～2009年	18	1	19 (39%)
2010年～2023年	16	0	16 (33%)
合計	48	1	49 (100.0%)

1999年以前では、管見の及ぶ限り論文数は14本である。その中の1本は1954年に書かれたものであるが、残り13本は1990年～1999年の論文である。1950年代の初期の文献は、大石（1954）の研究である。大石（1954）は国立国語研究所の日常談話の調査の中の、話し言葉の接続表現に関する調査結果を示した研究である。接続表現の談話の中の出現位置と、用法に関して分析したものであった。話し言葉の接続表現は、日常生活の中で無意味に近い「遊び言葉」の使用が多いと指摘している。本稿の研究対象の中で、接続表現の意味の希薄化に関して論じた最も早い文献である。それ以降から1989年の年末までは、本稿の研究対象の中に該当する文献が見られなかった。馬場（2010）が指摘しているように、1960年前後は、国語教育との関わりから、文章論的立場から接続表現を取り上げた研究が主流を占めていた。1990年以前は、話し言葉より書き言葉における接続表現の研究が主流だった。

1990年前後から談話への関心が高まることによって、話し言葉のデータを分析し、接続表現を検討するものが見られるようになった。1990年～1999年の約10年間は、話し言葉における個別の接続表現及び接続関係から研究されているが、接続関係<sup>6</sup>から見ると、主に順接関係（だから・それで・で）、並列（そして・それから）、換言（つまり）、補足（だって）に関する研究に分かれる。その中には、接続表現の意味に関する研究だけではなく、文脈展開機能の視点から分析した研究もあった。ここで挙げられるのは佐久間・鈴木（1993）や沖（1998）などである。佐久間・鈴木（1993）は接続関係の種類と文脈展開機能の観点から、女子学生の日常談話で、接続表現の使用としては添加型と順接型が多く見られ、文脈展開機能では「進める」「重ねる」ものが多いことを指摘している。沖（1998）は、「あるいは」「または」の意味を考察し、それぞれの基本的な用法と派生的な用法を論じており、これらが談話展開接続機能を持っていると述べている。また、この10年間は、接続表現の意味・機能と談話構造の関係性に関する研究だけではなく、「話者の属性」「会話者間の人間関係」に着目した研究もあった。沖（1997）は、「現在の大学生世代」に限定し、対話で使用されている接続表現「だって」に着目した。「だって」の本来の用法が相手への反発を基調にした談話（文接続）であるのに対して、新用法は親密な関係を持っている相手と会話する際に、相手の立場への配慮を示す「同調・共感的な気配り談話」というものであると指摘した。さらに、1999年には、談話標識としての機能を取り上げた研究（林1999）も現れるようになった。

2000年～2009年は、1本のテクニカルノートを除くと、論文数は18本である。この時期に

<sup>6</sup> 市川（1978）では文と文との論理的関係そのものを、文の接続関係と呼んでいる。ここでは、市川（1978）が指摘した「文の接続関係」の概念を用いた。また、ここでの接続表現の分類に関しては、石黒（2016）の中分類に基づいて述べている。

は、1999年以前と比べると、接続表現が本来の意味・機能から離れ、意味の希薄化及び、機能拡張に着目する研究が増えてきた。接続表現は単に文脈展開ではなく、コミュニケーション上のストラテジーとして話者の表現選択に現れているといった捉え方も見られる。川越(2006)は、聞き手に対して配慮があるか否かに着目し、「ただ」「ただし」「ちなみに」「もともと」の使用実態を分析し、上下関係や利害関係を考慮する際には、「ただし」が使えず「ただ」が使われていることを指摘する一方、聞き手に対してこのような配慮が必要ではない際に、「ただ」と「ただし」は置き換えても意味の違いがさほど生じないと指摘している。萩原(2008)は、「人間関係という指標」から、接続表現「だって」の使い方を考察した。「だって」は「人間関係」が近づくで使用が増えたことを指摘し、「だって」は「会話相手への心的依存度」と関わり、「相手に察しを示す機能」から「相手から察しを求める機能」までの機能拡張が見られると指摘している。この時期の研究は、接続表現の談話の中の位置、先後文脈の有無や文末表現との共起関係のような談話構造を中心として接続表現を分析しただけではなく、「社会的位相」や「話者心理・態度」などが重要なキーワードになっていることが察せられる。さらには、この時期には談話標識としての機能を取り上げる研究も現れた。大石(1954)が指摘した、接続表現が「遊び言葉」として機能しているといった見方にとどまらず、小出(2008)が指摘するように、接続表現が本来の論理関係の意味・機能を失い、フィラーのように間つなぎや発話の切り出しのような話し手の心的態度を表す言語現象を「フィラー化」と呼ぶような研究も登場した。本来であれば論理関係を示す接続表現が、話し言葉の中で意味を失い、一方で機能が拡張している用法があることは、この時期にしばしば言及されている。

2010年～2023年の研究論文数は16本である。この時期の研究は、話し言葉を考察する際に、ジャンルごとでの使い分けに着目している研究が増えている。会話と対話以外には、講義や経験を語る談話といった独話にも着目されている。石黒(2010)は、講義で使われている接続表現と新聞で使われている接続表現を比べ、接続表現の使用に関しては大きな違いが見られず、講義は書き言葉に近い性格を備えていることを指摘している。本稿の分析対象とする文献の中で、2010年以前にもジャンルを限定し、接続表現の使用実態を考察した研究があるが、逆に接続表現の使用実態から、ジャンルごとの相違点に関する研究は見当たらなかった。さらに石黒(2010)は、接続表現は「重要情報予告機能」を持つが、それが接続表現をその出現する文脈の中で総合的に捉えることが講義の接続表現研究ではさらに重要になると指摘している。講義というジャンルに関する接続表現研究は、石黒(2010)以外には伊能(2012)、青木(2017)などが挙げられる。また、コーパス研究の発展によって、複数のジャンルで接続表現の使用実態と比べることで、各接続詞の特性について分析した研究も現れた。中俣(2022)は、「中納言」の包括的検索システムである「まとめて検索 KOTONOHA」を利用し、話し言葉5ジャンル、書き言葉5ジャンルにおける並列を表す接続詞の出現状況を分析した。そこで、書き言葉コーパスのジャンル間の関係性はそれほど変わらない一方で、話し言葉コーパスはそれよりも軟らかい文体として位置づけられること、接続表現「そして」が最も文体的特徴の乏しい接続表現であることが指摘されている。一方で、原田(2023)は複数のジャンルごとの比較ではないが、『名大会話コーパス』を用いて複数の接続表現を同時に比較した。原田(2023)は出現回数の多かったものの中から、「でも」「だから」「だって」「しかも」に着目し、元来の意味・機能から逸脱して曖昧になりフィラー化するものを「しかも」「でも」「だって」「だから」の順で起こ

りやすいと述べている。つまり、複数の接続表現を比較しながら、希薄化しやすいものと、希薄化しにくいものの両方を視野に入れて論じたものである。原田(2023)はさらには、接続表現「でも」と副詞「やはり」の親和性が高いと指摘している。このように、2010年以降では、コーパス言語学の発展のこともあり、量的観点から接続表現の意味特徴だけではなく、接続表現と他の品詞との関連性の分析も増加していることが確認できた。

1954年～2023年の約70年間、接続表現の分析は、個別の接続表現の本来の意味・機能を分析した研究から、意味の希薄化と機能の拡張現象を研究するものまで広がりを見せた。また、言語という記号を対象にした記述的な研究にとどまらず、「話者の属性」「会話者間の人間関係」のような社会属性を加味した「社会言語学」的な観点まで射程に入りつつある。さらには、接続表現の使用実態と話者心理との分析との関わりを論じた「言語心理学」、大量のデータを用いた「コーパス言語学」も増えており、研究領域の拡大が確認できた。

#### 4.3 研究対象となった接続表現とそうではないもの

具体的にどのような接続表現が研究されているのか、そしてそれぞれがどのような接続関係であるのかを表3に示す。

表3 分析対象となる接続表現の分類とバリエーション

大分類	中分類	小分類	バリエーション (見出し語)	
論理	順接	帰結 - 主観	だから/なので	
		帰結 - 原因	それで/で	
		仮定 - 推論	となると/とすると/だとすると/だったら/なら/ それなら	
		推移	すると/そうすると	
	逆接	齟齬	それが/しかし/だけど/けれど/けれども	
		制限	ただ	
整理	並列	添加	それから/そして/あと	
		累加	それも/しかも/それに/そのうえ/さらに	
	対比	選択	また	
理解	換言	加工	すなわち/つまり/あるいは	
		代替	ていうか/というか	
	例示	举例	たとえば	
		補足	理由	だって
			付加	ただし/ちなみに/もともと
展開	転換	移行	ところで	
		本題	じゃあ/じゃ/では	

表3が示すように、接続表現の分類を見ると、「論理の接続詞」「整理の接続詞」「理解の接続詞」「展開の接続詞」の石黒(2016)の4つの大分類の全てが登場している。この大分類のうち、

小分類のバリエーションの種類でみると「理解の接続詞」>「論理の接続詞」>「整理の接続詞」>「展開の接続詞」という順に既存の研究対象が現れている。特に「論理の接続詞」のバリエーションが豊富なことが確認できた。分析対象とする論文の中では、「で」、「だから」及び「だって」を論じているものが多く存在する。接続表現の意味の希薄化を焦点とする「で」の研究、人間関係・話者心理に着目とする「だから」「だって」の研究が多く見られる。

次に、石黒（2016）の分類に基づいて、本稿の分析対象とする論文の中で、十分に研究されていない接続表現を表4に示す。

表4 現れていない接続表現の分類とバリエーション

大分類	中分類	小分類	バリエーション（見出し語）
論理	順接	帰結 - 必然	したがって/よって/それゆえ
		帰結 - 評価	おかげで/そのせいで
		帰結 - 慎重	その意味で/その点で
		対応	そこで/そんなわけで/というわけで
	仮定 - 指示	そうすれば/でないと	
	逆接	抵抗	そのくせ/なのに
整理	並列	共存	かつ/あわせて
	対比	対立	これにたいして/それにたいして
		他面	一方/一方で
		反対	ぎゃくに
	列挙	番号	第一に/第二に
		順序	最初に/ついで
序列		まず/さらに	
理解	例示	例証	じつは/じつのところ
		特立	とくに/なかでも
		付加	ただし/ちなみに
		回帰	そもそも/それにしても
	結論	帰着	このように/こうして
		終結	というわけで/結局
		不変	いずれにしても/なんにせよ
		無効	とにかく/ともかく

表4に示しているように、まだ研究されていない接続表現の小分類とバリエーションは多いが、石黒（2016）の10種類の中分類の中で、「列挙」及び「結論」以外の8つに関しては言及している研究があり、小分類まで見ると、36分類の中の16種類（44%）については、研究対象の中で言及されていることが確認できた。

本稿の研究対象とする論文の中には、「列挙」と「結論」の中分類の中の接続表現が表れていない原因の一つとしては、「発話ジャンル」と関係があると考えられる。石黒ほか（2009）は談

話展開の指標として機能している接続表現をジャンル別に概観し、それぞれのジャンルでどのような接続表現がどれほど使われているのか、その出現頻度を調べることを目的としたものである。この調査データは主に書き言葉を中心として、社説、コラム、論文、エッセイ、小説、シナリオ、講義（参考）による接続表現の多寡が明確に示された研究である。ここでは、論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が、接続表現と相性がよい様子が見られると述べられている。つまり、文体は接続表現の使用に影響があることがこの記述からわかる。この点については、柴田（2017）や、馬場（2019）なども参考になる。柴田（2017）は、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）の講演の「講演種」「自発性」「発話スタイル」の違いに基づいて、話し言葉における43語の接続表現の文体差を点数化して示し、各接続表現の用法の特徴を明らかにした研究である。馬場（2019）は、ジャンルの違い、書き言葉・話し言葉の違い、硬さ・柔らかさの違いなどの類型的な文体の違いによって、接続詞が使い分けられているという観点に基づいて、接続詞の文体差を分析した。馬場（2019）はこの分析において定量的な指標を挙げており、「内容・表現の文体的特徴を表す分類指標」には、『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』で示された「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」の5指標に従い、その5指標の平均値に基づき、用法別に接続詞の文体差を示した。本稿の研究対象とする研究論文は典型的には、雑談、日常会話のような自然談話でもあるため、似たものに順番をつけて並べる「列挙」（「まず」など）のような書き言葉の文体で使いやすい接続表現及び、それまでの話題をまとめる「結論」（「こうして」など）のような物語を語るような接続表現が出にくいと推察される。今後は、多様な観点から、話し言葉のジャンルごとに接続表現を分析する研究が期待される。

## 5. まとめと今後の課題

1954年から2023年の約70年間、接続表現の研究は大きな変遷を遂げてきた。本稿は、「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」と「CiNii Research」を用いて1954年～2023年9月末までの話し言葉における接続表現の論文の分析観点到に着目し、これらの研究の動向を概観した。具体的には、対象とする論文における研究を、「談話構造」「文法機能」「話者心理・態度」「発話ジャンル」「位相」の5つの観点から年代別に分けて分析を行うと同時に、これまでに研究対象となった接続表現及び、まだ十分に分析されていない接続表現の種類とその原因について、接続関係から分析した。

そこで、話し言葉の接続表現の分析は、個別の接続表現の本来の意味・機能を分析した研究から、意味の希薄化と機能の拡張現象を研究するものまで広がりを見せていることがわかった。接続表現の意味の希薄化における研究は、2つのアプローチに大別される。書き言葉と話し言葉で異なる用法がある場合に、接続表現の意味が希薄化した可能性があるとするアプローチと、一部の接続表現が他の品詞から派生した拡張的機能を持つとするアプローチである。また、言語という記号を対象にした記述的な研究にとどまらず、話者の属性、会話者間の人間関係といった社会属性を加味した「社会言語学」的な観点が射程に入り、話者の発話心理や発話動機を重視し、接続表現の機能拡張を研究したものも見られた。このような、個別の接続表現の「文法機能」を示す以外には、「話者心理・態度」「位相」の観点を入れながら、考察した研究も見られた。さらには、コーパス言語学の発展のこともあり、量的観点から接続表現の意味

特徴だけではなく、接続表現と他の品詞（副詞の「やはり」など）との関連性の分析も増加していることが確認できた。

書き言葉の研究と比べ、話し言葉の研究がまだ少ないという現状を踏まえ、接続表現の全体像を可視化するには、今後は、量的研究の手法で網羅的に分析した研究も期待される。さらには、「話し言葉的な文体／書き言葉的な文体」「柔らかい文体／硬い文体」「くだけた文体／改まった文体」などのさまざまな類型的な文体の違いにより、接続表現の使用特徴と社会属性にどのような関係があるのかといった研究も期待される。そしてこれらの研究はまた、話し言葉の使用実態から書き言葉の意味用法の再考にもつながるとも考えられる。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、査読者の先生方からは貴重なご意見を頂戴しました。心より感謝申し上げます。また、ご指導とご助言をしてくださった石黒圭先生と小磯花絵先生に、改めて御礼を申し上げます。末筆ながら、研究成果を引用させていただいた多くの文献著者の方々に対し、深く感謝の意を表します。

## 参考文献

- 青木優子（2017）「講義の話体と要約文の文体—接続詞の表現特性—」『文体論研究』63，日本文体論学会，pp.1-12.
- 石黒圭（2010）「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ（編）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版，pp.138-152.
- 石黒圭（2016）『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』実務教育出版.
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子（2009）「接続詞の機能領域について」『言語文化』46，一橋大学語学研究室，pp.79-94.
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 伊能裕晃（2012）「講義理解の手がかりとしての接続表現—受講ノートの分析による—」『早稲田日本語研究』21，早稲田大学日本語学会，pp.1-12.
- 大石初太郎（1954）「日常談話の接続詞」『言語生活』36，筑摩書房，pp.37-42.
- 沖裕子（1997）「新用法からみた対話型接続詞「だって」の性格」『人文科学論集』31，信州大学人文学部，pp.119-127.
- 沖裕子（1998）「接続詞「あるいは」と「または」の意味について—談話展開機能の獲得にふれて—」『人文科学論集文化コミュニケーション学科編』32，信州大学人文学部，pp.57-70.
- 川越菜穂子（2006）「補足の接続詞とコミュニケーション上のストラテジー—ただ、ただし、もっとも、ちなみに—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平』3，くろしお出版，pp.155-168.
- 小出慶一（2008）「発話行動における「で」の役割—「で」のフィラー化をめぐる—」『埼玉大学紀要教養学部』44（2），埼玉大学教養学部，pp.27-40.
- 甲田直美（2020）「会話における接続詞の発話位置と機能」『国語学研究』59，東北大学大学院文学研究科国語学研究室，pp.228-243.

- 佐久間まゆみ・鈴木香子 (1993) 「女子学生の日常談話の接続表現」『国文目白』32, 日本女子大学, pp.31-48.
- 柴田好葉 (2017) 「話し言葉における接続詞の文体的特徴について」『言語資源活用ワークショップ 発表論文集』2, 国立国語研究所, pp.85-92.
- 砂川有里子 (2011) 「日本語教育へのコーパスの活用に向けて」『日本語教育』150, 日本語教育学会, pp.4-18.
- 中俣尚己 (2022) 「並列を表す接続詞と文体—「まとめて検索 KOTONOHA」を利用して—」『計量国語学』33 (7), 計量国語学会, pp.422-434.
- 萩原孝恵 (2007) 「因果関係を表さない「だから」の存在」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』2, 昭和女子大学, pp.1-13.
- 萩原孝恵 (2008) 「人間関係と接続詞「だって」の使い方」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』3, 昭和女子大学, pp.37-54.
- 萩原孝恵 (2012) 『「だから」の語用論—テキスト構成的機能から対人関係的機能へ—』ココ出版.
- 馬場俊臣 (2010) 『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—』おうふう出版.
- 馬場俊臣 (2012) 「文章・文体（理論・現代）<特集>2010年・2011年における日本語学界の展望」『日本語の研究』8 (3), 日本語学会, pp.88-93.
- 馬場俊臣 (2019) 「接続詞の文体差の探索的分析—『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』5 指標を用いて—」『札幌国語研究』23, 北海道教育大学国語国文学会・札幌, pp.1-8.
- 原田朋子 (2023) 「話し言葉における接続表現の意味・機能に関する考察」『同志社大学日本語・日本文化研究』20, 同志社大学日本語・日本文化教育センター, pp.1-19.
- 林淑璋 (1999) 「会話分析と談話標識「で」「だから」を手がかりに」『言語情報科学研究』04, 東京大学言語情報科学研究会, pp.335-358.

